

Lessons for Newcomers from the Experiences of Zainichi Koreans

TANAKA Hiroshi

Osaka University of Economics and Law Center for Asia Pacific Partnership

Key Words: nationality, compulsory school attendance, social security

This essay introduces four aspects of the experiences of Zainichi Koreans in Japan.

Part one, "Nationality," explains that Koreans had their nationality changed twice without their consent. First, when Japan annexed Korea, the Korean people were incorporated unilaterally as Japanese. Second, the Korean people were notified that they lost Japanese nationality when Korea was separated from Japan after World War II. The author points out that these actions were taken only for the national benefit of Japan.

Part two, "Education," considers the changing connection between "compulsory education" and citizens and non-citizens during the Occupation and after restoration of Japanese sovereignty.

Part three, "Social Security," looks into the treatment of foreigners (including Koreans) in the social security system after World War II in Japan. Although Occupation reforms prohibited discrimination by nationality, nonetheless, discrimination was revived after the restoration of sovereignty through the distribution of benefits in the welfare state. The coming of Vietnamese refugees, however, obliged Japan to accept international human rights standards. Finally, Japan was forced to accept the principle of equality between citizens and non-citizens.

Part four, "Participation in the Public Sector," first considers the recruitment of non-Japanese as teachers in public schools. In the beginning, there were some differences among local governments, however, in 1991 a notice from the Ministry of Education urged local governments to hire foreigners who passed qualifying tests only as full-time instructors, not as regular teachers. This made discriminatory treatment official policy. Voting rights in local elections has not been achieved even though fifteen years have passed since the submission of a bill to establish such rights. Meanwhile, this has already been implemented in South Korea. These issues appear against the background of the larger question of how to confront history directly. This study attempts an overview of the problem of human rights for non-citizens in Japan.

特集：在日コリアンの過去・現在・未来

出自と起業

——在日マイノリティ・韓人の起業家活動の概要と
類型化及び内面的特性

河 明生 日本テコンドー協会会長

キーワード：マイノリティの起業、異質性、同化

マイノリティは上昇する道を閉ざされた結果、著しく営利活動の方向に進み自己の才能を発揮した。出自という属性と起業という経営の端緒は因果関係がある。在日マイノリティ中、企業活動で卓越性を発揮したのは韓人である。筆者は、彼らは「異質」であり、その一部は「特定の時代における企業家活動において卓越性を発揮する機会が多い」のであり、それは「徒手空拳から新規の事業を起こす起業能力によって表徴される」と『マイノリティの起業家精神——在日韓人事例研究』で主張した。本稿では右仮説を再検証した。彼らの内面的特性は傷心性と反発性であった。「一世」は韓民族的矜持に基づき反発し、より一層勤勉になったが「二・三世」はそうではなかった。同化の結果、韓民族的素養が低かったからである。だが被差別者としての屈折した感性が完全同化の歯止めとなり企業活動での意外性発揮の源泉になった。彼らは出自の公表の度合いにかかわらず積極的な広報活動を展開した。負のイメージに苦しめられてきたためイメージ戦略のもつ重要性を体験的に知っていたからである。

1 序

マイノリティとは国家的社会的に権力をもたない異質な少数派を言う。起業家活動とは創業者の経営的活動を言うが企業規模や持続性を問題とはしない。マイノリティは偏見や差別にさらされ国家的社会的に上昇する道を閉ざされた結果、著しく営利活動の方向に進み自己の才能を発揮しようとした¹。営利活動は起業の端緒であり、彼らの貨幣獲得に対する意欲を表徴している。貨幣はマイノリティを裏切らない。マジョリティ同様の権利行使を可能とするからである。しかし、貨幣獲得のみを起業動機とみなすのは人間に対する洞察力が足りない。先進国の経済発展過程を顧みると、彼らが果たした経済的機能や役割は高かった。異質異端それ自体が資本主義の精神の重要な源泉である²。彼らは固有の文化とマジョリティ文化の狭間で葛藤し marginal man³化した。社会的文化的に曖昧な位置にある彼らは entrepreneurship（企業家活動）における与件の変化に応じた創造的適応に適している⁴。その特性は傷心性と反発性である⁵。企業家活動の端緒も起業である。ゆ

えに生まれながら劣等的地位におかれた出自という属性と起業という経営の端緒は因果関係がある。この現象は日本でも知見できる。だが彼らの全てが起業能力を有しているわけではない。例えば、アイヌの起業は活発ではない。富裕な華僑華人は少なくないが、起業活動と言えるのは日清食品の安藤百福、USENの宇野元忠、インテリジェンスの宇野康秀等に限られており⁶、起業活動も注目すべき社会現象と言えるものではない。在日マイノリティ中、当該分野で卓越性を発揮したのは在日朝鮮韓国人（以下、韓人）である。その事実を認識できなかったのは韓人が日本人同様、黄色人種のため外見上識別が困難であり、日韓併合以来の同化政策と居住空間の持続的共有等により日本の風習、文化、言語にも長け、日常的に日本名を使用したからである。筆者は韓人の植民地朝鮮から日本内地への労働移動過程、とりわけ被差別部落等に流入・定住し、先住民の生業、例えば労働集約型低賃金労働市場での競合過程を明らかにした⁷。彼らの一部が未成熟低ステータス産業で展開した起業活動を検証し「マイノリティの一部は特定の時代における企業者活動において卓越性を発揮する機会が多い」のであり、その特性は「新規の事業を起こす起業能力によって表徴される」と『マイノリティの起業家精神——在日韓人事例研究』で主張した⁸。本稿は仮説提示から10年経過したことを踏まえ、韓人の起業活動を「資料」⁹に基づき再検証する。だが日本敗戦前後、迅速に資本と技術を解放された朝鮮に移住し「財閥」を形成したコーロンの李源萬、韓一合織の金翰寿、起亜自動車の金喆浩、大同工業の金相萬やセナラ自動車の朴魯禎等を研究客体とはしない。解放後も日本に残留しサンフランシスコ講和条約まで「日本国籍を有する外国人」とされ、日本政府による日本国籍剥奪後も定住した約50万人の韓人を研究客体とする。50年度国勢調査によれば、韓人人口は46万4277人。在日一世韓人（以下「一世」）は23万2371人、在日二世韓人（以下「二世」）と在日三世韓人（以下「三世」）は23万1906人であり、65年度外国人登録統計によれば、約7割は大阪、東京、兵庫、愛知、京都、神奈川等の大都市部に定住した¹⁰。大都市の経済的機会が、マイノリティを吸引したからであろう。

2 概要

(1) 韓人の起業の端緒

韓人の起業は低賃金労働力を存立基盤とする労働集約型軽工業の中小零細企業が集積していた大都市部の工業地域、とりわけ商業資本が支配する手工業的技術を要する工業が盛んな地域で展開された。これらは家内工業のみが可能であって機械制工業の進出が困難なものが少なかった。また機械制工業化が促進された産業の中にも家内工業を補足的に利用しなければならないものが存在した。当該工業品は素材の別、季節の別、輸出国の別、流行等により多種多様であり、この全てを一つの工場において生産することはできない。しかも当該市場における需要や消費者動向は絶えず変動することからリスクの高い見込み生産や大量生産は回避された。それゆえ多品種少量生産が要請され、ここに分業の必然性が生じる。商業資本主導の下、特定地域における手工業的分業体制が推進・強化された所以であり、この特性が生産工程のごく一部を請負う家内工業者の新規開業を容易にした。彼らは資本の裏付けがないにもかかわらず、職工としての経験と好況期の需要を見込ん

で開業した。その存立基盤は低賃金労働力の確保である。家内工業者の増加に伴い創出されたのが低賃金労働力需要であり、それに適応したのが大都市部の被差別部落やスラム等に流入した韓人であった。韓人の大部分は不熟練労働者であり、平易な工程作業や熟練工の補助、運搬、整理等の臨時雑役工もしくは見習いとして低賃金労働力を希求する企業に採用された。その中の一部が、従事する過程でノウハウを蓄積し、生産工程のごく一部を請負う家内工業者として独立した。彼らに幸いしたのが、当該業界の慣習とも言える問屋や商社による工賃の前貸しであった。資金が無くとも、意欲さえあれば開業できたのだ。また、出自は当該業界においては問題とはされなかった。すでに被差別部落民等が低賃金労働者として当該業界に従事し、その一部が開業していたからである。例えば、京都の西陣織や友禅染工業、神戸や大阪の靴工業、福井の眼鏡工業等である。

戦前、零細から中小企業へと飛躍した韓人も存在した。例えば、1930年代の大阪のセルロイド製品製造業、ゴム靴製造業、錠前製造業、鏡製造業、クローム革製造業などにおける「一世」の成功事例がある¹¹。その大部分は利潤の根源を機械化による大量生産に求めるのではなく、もっぱら低賃金労働力の確保に求めるという労働集約型工業において展開された。これが韓人の起業活動に有利に作用した。好不況にかかわらず、時代が下るに連れ急増した韓人渡日者を日本人よりも低賃金で持続的に雇用できたからである。その際、必要とされた起業者資質が労務管理能力である。この資質が韓人内部でスキルとして蓄積され、戦後、他の業種でも応用することが可能となった。製造業はもとより、戦後の高度成長により形成された第三次産業、例えば、労務管理能力が問われるパチンコ・ホール業やタクシー業等に応用されたと考える。

(2) 社会経済的与件¹²

(a) GHQによる韓人の曖昧な地位と闇市

日本敗戦時、劣等的地位から解放される歓喜の心理的起動力、とりわけ朝鮮儒教の孝^{クミファンヒョク}＝錦衣還郷^{スグチョシム}や首邱初心を基底とする「新朝鮮建国のエートス」等により、意気軒昂な勢力が大都市部に現れた。韓人である。彼らの勢いは営利活動、とりわけ起業で顕著となった。例えば『日本ゴム工業史』によれば、戦後、神戸ゴム靴工業の復興は急速に進んだ。1946年度、企業及び工場の増加率はいずれも全国最高であった。「同地域に終戦時には存在しなかった在日朝鮮人企業が多数設立されたという特殊事情による」¹³。韓人が神戸港倉庫に保管されていた軍需物資のゴム原料を官憲を恐れず獲得できたことが有利な与件となった¹⁴。大阪では十大紡績の阪本紡績創業者の徐甲虎の事例がある。彼は敗戦間際に軍需物資の闇取引により資本蓄積を果たし、遺棄同様の紡織機等を廉価で買収した¹⁵。阪神の労働集約型工業に多くの韓人が低賃金労働者として従事し、スキルとノウハウが韓人内部で蓄積され、起業を容易にしたと考える。

日本政府は46年3月、1千名程度の韓人が10万円以上の資産を有する特別財産税の課税対象であり¹⁶、同年の第90回日本帝国衆議院では韓人等の闇市での活発な活動を東南アジアの華僑勢力を彷彿させる国家経済の脅威とみなし対策を審議した¹⁷。確かに「一世」は大都市部に群生した闇市で活発に活動し、その一部は資本蓄積を果たした。それを可能としたのは連合国統合参謀本部がGHQに指令した「日本占領及び管理のための連合国最高司令官に対する降伏後における初期の

基本的指令（45年11月1日付）で規定された「Liberated peoples」という曖昧な地位であった。解放民族＝韓人は、日本政府の司法権が及ばないのではないかと、日本官憲に危惧されたからである。ゆえに韓人はGHQに治外法権が明確に否定される迄、警察権力を恐れず闇市での活発な活動が可能となった。例えば、ロッテの辛格浩は闇市でポマードやクリーム等を製造販売し、社員の平均月給200円の時代、毎月4～5万円の利潤を獲得した¹⁸。信用組合最大手関西興銀の実質的創業者で韓国最古の朝興銀行買収に成功した李熙健も、起業者活動の出発点は大阪の闇市・鶴橋国際マーケットである。韓人勢力が優勢だった闇市が存続発展したものもある。例えば、東京上野アメ横、大阪鶴橋国際商店街、神戸三宮ジャンジャン市場等である。このように敗戦後の混乱期に群生した闇市が、「一世」の経済的機会となり、資本蓄積を可能とした。

(b) 韓人の財産権の保障及び企業活動の制度的許容

GHQ担当官は占領期「実業界でかなり重要な地位をしめた朝鮮人も、少数いた（略）当時、ゴム製品・繊維工業界などに朝鮮人の有力実業家が点在していた（略）戦後の日本において、朝鮮人の経済地盤を拡大するための出発点となりえた」と回想する¹⁹。徐甲虎、辛格浩、大和製罐の孫達元、三栄産業の文東建、大都製作所の李在東等を指すと思われる。日本政府は韓人を「東南アジアにおける華僑勢力を彷彿させる脅威」とみなし「昭和二十四年政令第五十一号・外国人の財産取得に関する件」等でその衰退をはかった。しかし、韓人は反発できるマイノリティであった。彼らは財産権を死守すべく組織的な反対運動を展開し、日本人左派勢力等の支援を得て同法を骨抜きにした。同法「第二条一」の「外国人」の定義には「戸籍法（昭和二十二年法律第二百二十四号）規定の適用を受ける者」とあるが「但し、昭和二十年九月二日に日本の国籍を有し、且つ、同日以降引き続きこの政令の施行地域に居住する者は除外する」と修正させた²⁰。また「昭和二十五年一月十四日付政令第三号外国人の事業活動に関する政令」による企業活動の抑止も阻止した。「第二條この政令において『外国人』とは、外国人の財産取得に関する政令（昭和二十四年政令第五十一号）第二條第一項及び第二項に定める外国人をいう」と適用除外が明文化され²¹、「外国人財産取得規則の一部を改正する」ために公布された「昭和二十七年四月二十六日外資委員会規則第一号」においても韓人の企業活動を抑制する条文をつけ加えることを阻止している²²。このように日本政府の意に反して韓人の企業活動は制度的に許容されたのであり、その法制度的保障無くして韓人系企業の存立はあり得なかった。戦後、同順泰等の在韓華僑の経済的勢力を法制度的に衰退させることに成功した韓国政府とは対照的である。

(c) 就職差別に基づく未成熟低ステータス産業への韓人中の才能の集中

植民地期、上昇志向の強い韓人は日本内地へ留学した。例えば、辛格浩は農業系技師だったが「日本人達から蔑視されず」²³、「人間らしい待遇を受け、堂々と生きるためには上級学校へ進学し学問を修める以外にない」²⁴、「もっと勉強したい、偉くなりたい」と渡日した²⁵。平和の鄭東弼は南満洲鉄道員だったが「中卒程度では出世はおぼつかない、大学は出ておかないといけないと思って日本へ渡ってきた」²⁶。しかし、韓人が「希望する職業を求める事は全く至難中の難事で、現在の社会事情よりするならば朝鮮人だと言ふことだけで、如何に才能職見が内地人に遜色がなかりと、職業戦線より除外されると言ふ悲しむべき状態に放置されている」²⁷。1945年8月、韓人

は解放されたが差別待遇は変わらなかった。ゆえにGHQは「いかなる労働者に対しても国籍・信条または社会的地位を理由として絶対に差別を行わないよう保障すること」を日本政府に指令した²⁸。この就職差別が「一世」の起業者活動の与件となった。担手は貧しい階層の私費留学生である。例えば、東大経済学部を卒業後、公認会計士試験に合格しながら焼肉セナラ・光復産業を起こした廉泰泳、早大法学部・同大学院を卒業しながら衣料品卸金岡を起こした金鐘徳、中大法学部卒業後、高等試験行政科に合格しながらゴム靴業香山ゴムを起こした李永秀、大和製罐の孫達元、金井企業の金熙秀、東洋グループの李守鉉、太陽家具百貨店の李秉七、MKの俞奉植、ダイショーの金丙達等である。「一世」が起業したのは未成熟低ステータス産業であり、日本人エリート層は見向きもしなかったが、「一世」にとっては自己がおかれた低位の階層から抜けだすための限られた手段となった。この現実が韓人中の才能を当該産業に集中させ競争的發展を促進させた。その典型が日本にしかない大衆娯楽パチンコ産業である。法政大学を卒業したマルハンの韓昌祐によれば「大学を卒業しても（略）誰も雇ってくれない」²⁹。パチンコ「経営者の70%は在日韓国・朝鮮人（略）企業に就職できない、銀行からお金を借りられない。（略）差別への反動から現金が入るこの商売に自然に集まっていった。（略）パチンコ産業というのは結局、差別の産物」である³⁰。だが彼らは日本社会の職業上の序列を秩序立てている職業的価値観の心理的束縛からの解放が容易であった。例えば、高知ホームランの李相均は「パチンコは極道商売」と中傷されたが「これが極道なら本当の商売などないと確信し」たという³¹。

就職差別は「一世」よりも教育水準が高く、同化が進行したため異質でなくなりつつあった「二世」「三世」に対しても行われた。例えば、60年代に京都大学を卒業した「二世」の進路は、工学部出身の朴某は名古屋の金貸業、法学部出身の俞某は福岡のパチンコ業、金某はレストラン、農学部出身の曹某は京都のパチンコ業に従事した³²。焼肉大同門・西村商事の趙煥斗は早大政経学部を、副社長の全奎長は京大法学部を卒業しているが、彼らと同期の早大と京大を卒業した日本人が焼肉店を開業するであろうか。就職差別の結果、起業したとみなすべきであろう。シネカノンの李鳳宇は「まともな就職できねーし、将来どうなんのかな？ 朝鮮人だったらあの時期誰でも直面する問題に悩む」のだ³³。このように韓人は日本人とは異なり高学歴と職業とは相関関係にたたなかった。

低学歴者にとっては一層深刻であった。中小企業ですら雇いたがらなかったからである。例えば、アートネイチャー西部の姜琪東は中学卒業後、約60の職種を転々とした。「どの職場でも一生懸命働くので2カ月程すると「正社員として採用するから戸籍謄本を」といわれ、そのたびに韓国人であることがわかれば「また首をいい渡される」と自主退社をくり返したという³⁴。彼らに対する就職差別は、少なくない才能を失意の中に埋没させた。しかし、彼らは生きて行かねばならない。それゆえ「一世」が開拓した未成熟低ステータス産業で起業したのだ。例えば、京都福田の丁海雲は「生きるために何かしなければ」と暗中模索し、日本人なら始めない「苦しい仕事」、「嫌がる仕事」を始めた³⁵。しかし、彼らは資本さえあれば本国投資で郷里に錦を飾ることが可能だった「一世」とは異なり、未成熟低ステータス産業での成功に魅力を感じなくなった。同化が進行し日本人同様の職業観を涵養したからである。そこで新たな分野への挑戦が始まった。その典型が孫正義である。彼の父・孫三憲は九州有数のパチンコ業者であり、長男の孫は米国から帰国後、福岡でパチンコ店

を経営しFC展開を研究している。だが彼は韓人の典型的従事産業に魅力を感じなかった。そこで上京しパソコンソフト卸業という新分野を開拓したのだ。これは「二世」「三世」中の才能の他分野への分散を意味している。

このように世代間の差異こそあれ、韓人に対する就職差別が彼らの才能を未成熟低ステータス産業に集中させ、結果として当該産業の競争的発展を可能にしたと考える。

3 韓人の起業者活動の類型化

(1) 「一世」の起業者活動の類型化

(a) 独立型起業者活動

戦前・戦時中に労働者として従事する過程で独立に必要なノウハウを蓄積し当該産業において起業者活動を開始した者をいう。例えば、神戸や大阪のゴム靴工業、京都の西陣織及び友禅染工業等、個別的には阪本紡績の徐甲虎、日本有機化学工業の安在祐、浩洋ゴムの朱鳳奎、太陽家具百貨店の李秉七等をあげることができる。

(b) 転業型起業者活動

独立後に転業し起業者活動を展開した者をいう。

(i) 既知産業転業型起業者活動

独立・起業後、既知の産業に転業した者による起業者活動である。例えば、コルク工業から製缶工業へ転業した大和製罐の孫達元、セルロイド工業から自転車工業へ転業したOGK技研の朴景雨、ゴム工業から粘着加工業へ転業した東洋ケミテックの徐福龍、焼肉店から焼肉タレ製造業へ転業したダイショーの金丙達、パチンコ店からパチンコ機器製造業へ転業した平和の鄭東弼やエース電研の裴鐘城等である。

(ii) 未知産業転業型起業者活動

独立・起業後、未知の産業に転業した者による起業者活動である。例えば、化粧品製造業からガム製造業へ転業したロツテの辛格浩、家電下請けからパチンコ周辺機器製造業へ転業した大都製作所の李在東、スクラップ回収業から三洋電機洗濯機等のOEM電気機器製造業へ転業した湖南精工の金相浩、衣料品販売から不動産業へ転業した金井企業の金熙秀、古物商から水産業へ転業した松原水産の朴天洙、雑貨販売からゴルフ用品販売へ転業したコトブキゴルフの安秉根等をあげることができる。

(iii) 模倣転業型起業者活動

「一世」による起業者活動が活発に展開されたのは日本の高度成長によって市場が形成された第三次産業である。例えば、不動産、各種金融、タクシー、パチンコ、焼肉、ボーリング、カプセルホテル、インベーダーゲーム、貸しレコード・ビデオ、カラオケ等が全国に急速に普及したのも韓人がこの業界に殺到したことと無縁ではない。営利活動において卓越性を発揮するマイノリティの特性といえる模倣性に起因する。労働従事経験の有無にかかわらず韓人成功実績を目安とし模倣したのだ。例えば、マルハンの韓昌祐、東洋観光の李三奎、龍伸

興行の具次龍、松本祐商事の李承魯、堂島ホテルの文秉彦、東海商事の安商宅、和田アキ子の叔父で漫画『ミナミの帝王』のモデル・金和忠等をあげることができる。

(c) その他起業者活動

パチンコ湖月で成功し、韓国大統領朴正熙の本国投資要請により関釜フェリーを起こした朴鐘、占領軍の性犯罪を危惧した神戸警察の要請を受け風俗営業を始め「キャバレー王」となった近畿観光の裴在潤がいる。倒産した会社を再建する過程で当該業界での自己の経営的適性をみいだした者もいる。元金融業者に多い。例えば、MKの兪奉植、協和ダンボールの李鐘煥をあげることができる。新しい格闘技を創造・普及し、格闘技産業を築き上げた者もいる。「カラテ・チョップ」の「力道山」としてプロレス産業を起こし、戦後最大のヒーローとなった日本プロレスリング興業の金信洛、「ケンカ・カラテ」の「大山倍達」となり、劇画「空手バカ一代」等のフィクションを通じてフルコンタクト・カラテ産業を起こした極真会館の崔永宜等をあげることができる。

(2) 「二世」「三世」の起業者活動の類型化

「二世」「三世」による起業者活動は「一世」と比較すると停滞している。経済的機会の減少、同化の進行、就職差別の改善による才能の分散等に起因する。もっとも朝鮮儒教の影響による長男への事業継承は進んでいることから、企業活動それ自体は停滞しているとは言い難い。例えば、モランボンを傘下とするさくらグループ、日本初の焼肉店・食道園、脱臭剤キムコを開発した日南化工、廉価な理髪料金の先駆け・大衆理容院等である。

(a) 新独立型起業者活動

「一世」が従事・開拓した産業に労働者として従事する過程で独立に必要なノウハウを蓄積し、当該産業で起業者活動を開始した者である。

(i) 伝統産業独立型起業者活動

「一世」が従事した「伝統産業」における起業者活動である。例えば神戸ケミカル靴工業や福井眼鏡工業における起業者活動である。「一世」の父が創業した零細資本を継承し、発展させて実質的創業者となった者もいる。例えば、オリンピックの金良樹、プラスチック製品最大手でLED家電にも進出したアイリス・オーヤマの趙鏞世、スクラップ業中堅・玉岡の姜鐘石、卓上日記のトップメーカー・紙製品加工業タカハラの高成国、カッティング・フレームのパイオニア・眼鏡フレーム大手石山眼鏡の金炳龍等をあげることができる。戦後「一世」が開拓した結果、新たに伝統産業化した業界での起業者活動もある。例えば歓楽業界である。キャバレー勤務後、福井の永平寺に入山し、下山後、仏教思想を応用した「キャバレー・ロンドン」を全国展開した三経グループの兪在根である。

(ii) 新産業独立型起業者活動

戦後、韓人が新たに進出・開拓した産業での起業者活動である。「一世」同様、第三次産業において活発に展開された。不動産業や金融業に偏在集中している。比較的小資本での起業者活動には見返りが大きいという投機性が、上昇志向の強い韓人を吸引したと考えられる。彼らの大部分はバブル経済終焉と共に破綻している。各種金融業では、中卒後、伯父の営む

金貸業を手伝うことでノウハウを蓄積し、19歳で独立したアイフルの福田吉孝、商工ファンドの大島健伸等である。パチンコ業にも多かったが、資本力の乏しい中小業者の廃業が相次いでいる。被差別部落やスラムに形成された朝鮮部落の韓人を顧客としたホルモン焼きを嚆矢とする焼肉産業を発展させたのは「二世」「三世」である。清潔な店舗内装、接客技術の進歩、明朗会計等によるものだが、より重要なことは「二世」「三世」が日本人顧客のニーズを的確に把握できる感性を涵養した点にある。同化の所産と言える。新宿明月館で修行した後、叙々苑を起業した朴泰道やトラジの金信彦等をあげることができる。戦後の格闘技産業は「一世」が創造したと言っても過言ではない。その嚆矢・力道山の弟子、アントニオ猪木に師事した後、独立団体を起業し新たな格闘技ブームを起こしたのが「二世」の長州力および「三世」の前田日明である。

(b) 新転業型起業者活動

独立後に転業し、起業者活動を開始した者である。

(i) 新模倣転業型起業者活動

韓人の成功実績を模倣し、当該産業に転業した者による起業者活動である。第三次産業で活発に展開された。例えば、ダイヤモンド問屋から不動産業に転業した高山物産の崔鎮官、運送業から金融業に転業した淡路総業の鄭幸男、パチンコ業では解体業から転業した全泰通商の全親民、電気店から転業したオータの太田秀吉、孫正義の父・孫三憲や叔父・孫在憲等は九州最大手であったが、開業の契機は模倣であり金貸しから転業している。平和、エース電研、大都製作所等の成功によりパチスロ製造メーカーへの模倣転業もある。例えば、鉄屑回収業から転業し、キャラクター系パチスロで急成長したフィールズの山本英俊がいる。近年、同世代による開拓型起業者活動（後述）に刺激された者が現れている。例えば、孫正義がゲームを主体とするパソコンソフト卸売業で成功した頃、カメレオンクラブの金勇均はTVゲームショップを開業している。インターネット産業にも、ガンホーの孫泰藏やOK ウェイブの兼元謙任等がいる。かつら養毛産業にも見受けられる。これはアートネイチャーの創業に「二世」が深く関わっていたことに起因する。例えば、リーグ21の盧勝正である。

「一世」の成功を模倣する者が続出し地場産業となった事例もある。例えば、徴兵された高崎第38連隊で解放を迎えた鄭東弼がパチンコ産業とは縁もゆかりもなかった群馬県桐生市で平和を起し成功した結果、パチンコ産業が同地の地場産業となった。群馬県の韓人人口は3千人程度だったが、確固とした同胞社会を構築しており、その資金的裏付けとなったのが彼らの多くが従事していたパチンコ産業であった。岩手盛岡冷麺もその一つである。盛岡の名物はわんこ蕎麦で同地は麺食が盛んであった。食道園を開業した「一世」の楊龍哲（青木輝人）が、故郷の名物ハムン冷麺を平壤冷麺と称して販売したのが嚆矢となる。非鉄金属業から焼肉店に転業したペコ&ペコの「二世」の李榮植が地元TV等のCMで冷麺を宣伝し活況を呈し模倣者が続出した。鉄屑業から転業を模索していた「二世」の邊龍雄がびよんぴよん舎創業時に日本めんサミットへ出店した際、「盛岡冷麺」と初めて名乗り、マスメディアを通じて全国に知られて定着し、模倣者が続出して地場産業となった。

(ii) 新未知産業転業型起業者活動

韓人による成功実績のない未知の産業に転業した者による起業者活動である。例えば、鋼材販売業から物流機器製造業へ転業した三進金属の朴正準、金属プレス業から松下電器等の屋外広告業に転業した電飾工業の任永燦、化粧品販売から太陽熱温水器販売に転業した朝日ソーラーの林武志等をあげることができる。

(c) 開拓型起業者活動

韓人の就労実績および企業活動とは無縁な未開拓・未成熟産業において起業者活動を展開した者である。例えば、教育のビジネス化の先駆け・呉学園の呉永石、通信価格破壊の旗手・ソフトバンクの孫正義、弁当大手・本家かまどやの金弘周、米国ソース市場で販売実績1位を誇るヨシダフーズの吉田準輝、韓流ブームを仕掛けたシネカノンの李鳳宇、堂島ロール・モンシュシュの金美花等をあげることができる。

4 内面的特性

(1) 公表された起業者精神から検証する傷心性と反発性

起業者活動は格闘技と似ている。大企業の専門経営者のあり方がプロ球技の監督であるとするなら、中小零細企業を起こす創業者のあり方は当たり所が悪ければ死ぬかも知れないプロ格闘技の選手に等しい。前者は失敗しても個人責任を追及されることは稀であり退任することでその責めを免れるが、後者の失敗は破産や失踪、時として死の選択を迫られることもあるからである。だが球技とは異なり格闘技は努力が才能を越える場合が多々ある。ゆえに要請される資質は、知的能力よりも事業を成功させるという強固な意志力である。マイノリティの場合、それに加えてマジョリティに対する負けじ魂が不可欠である。

「一世」はその不幸な環境により、感情の起伏が激しい。傷つき易い心性を有し反発するマイノリティであった。その資質が起業者活動で有効に作用した。彼らは屈辱を体験した。例えば、鄭東弼は特高警察に無実の罪で逮捕拷問され瀕死の重傷を負った。辛格浩によれば「日本人はアメリカを人種差別のひどい国だというのが、日本の方がはるかにひどい」³⁶「世界で一番民族差別の激しいのは日本をおいてない」³⁷。林屋ビルの林守根は「ひどい奴隷あつかいを受けて育った幼・少・青年時代」を「いつまでも忘れない。忘れようとしても身体が覚えている」³⁸。太陽貿易の宋斗満は「半島人」と蔑まれ喧嘩が絶えなかったが還暦を迎えても「民族差別はからだが忘れない」³⁹。東亜産業の李鐘泰は「雇い主の日本人」から給料袋を投げつけられ、荒川の土手を歩いて空を見上げたら「あまりの口惜しさに涙がこめかみを伝って落ち(略)日本人に使われることを潔しとしない」と考え起業した⁴⁰。東海産業の都正煥は北海道旭川市役所の指名業者となり工事を受注したが「日本人に仕事がないのに、どうして韓国人に仕事をやるのか」と役所に怒鳴り込まれた⁴¹。しかし、彼らは具体的な差別体験については沈黙を守る。三桂興行の金守洪は「みんな話したら、涙がでる」⁴²。愈奉植は差別体験を語ることは敗北主義に通ずると言う⁴³。彼らは被差別者という逆境を克服すべく、より一層勤勉たらんと欲しチャレンジ精神の具現者となった。東洋ケミテックの徐福

龍は「日本人のやっていない産業を作りあげようと皆が意欲的に頑張った」結果、日本有数の粘着・コーティング技術を開発した⁴⁴。日本有機化学工業の安在祐によれば「表面上は差別も目立たないが、良質・安価での提供という物的差別と、精神的差別があります。だが、私はそういう逆境が幸いした⁴⁵。浪速精密の具斗謨も「私たち韓国人が生き延びていこうとすれば、誰も足を踏み入っていない分野を担わなければならなかった」⁴⁶。彼らは日本人よりも勤勉でなければ勝ち残ることはできないと危機感を持った。西九州製鋼の李都九は「朝鮮人だから差別されたけど、朝鮮人だからもっと頑張らなければだめだと思いました」⁴⁷。韓昌佑は「日本社会では日本人と同じだけの信頼度ではやっていけない。やはり日本人の何倍も努力しなければ相手にしてくれないと肝に銘じ」⁴⁸、「日本人が10時間働いたなら、僕は15時間働かないと対抗できなかった(略)僕は差別を反面教師として反発することで伸びてきた」⁴⁹。被差別体験は「一世」の反骨の闘争心を強化し、取引慣行の破壊等、同業他社との熾烈な競争、摩擦や軋轢を恐れなかった。それは時としてイノベーションと呼ばれることもあった。和を尊ぶ日本の経営秩序に慣れ親しんだ同業者からみれば業界の秩序を乱す非協調的な態度は是認できない。当然「一世」は敵意にも似た怪しい風聞にさらされた。例えば、辛格浩は「朝鮮人のチューイングガム生産を阻止すべきだ」と中傷された⁵⁰。大和製罐が製缶業界第2位に躍進したのは孫達元の実績だが同業他社からは「むこうの人間だから、ああいふ強引なことができる」、「利益を韓国にもっていくことが目的だから日本の業界の将来のことなど眼中にない」と反発された⁵¹。この怪しい風聞は成功の度合いに応じてより一層強まり「一世」が率いる企業は業界から孤立した。日本人であれば孤立に絶えられず、その圧力に屈したかも知れない。少なくとも彼らを社長とおおぐ日本人従業員達は動揺したに違いない。しかし、「一世」は違った。攻撃的経営観を一層強化したのだ。実績や品質等の客観的批判であれば甘受したであろう。しかし、出自は現実の企業経営とは無関係なものであり、韓民族的矜持の信奉者にとって出自の中傷は父母や先祖に対する許し難い侮辱であった。だからこそ、彼らは負けるわけにはいかなかった。仮に、彼らが自民族に対して誇りを持たず卑下的であったのなら埋没したであろう。例えば、度重なる中傷は辛格浩を「さらに発憤させ、実力を養う道しか妙案がないことを確信させ」て⁵²「日本製菓業界制覇の執念」を持たせ⁵³「攻撃こそ最大の防御」という攻撃的経営観⁵⁴を強化した。この反骨の負けじ魂は「一世」の非合理的な起業家精神の構成要素の一つであった。出自にまつわる怪しい風聞が客観的事実であったか否かは問題ではない。「一世」自身が傷付き不当であると憤りを憶えれば十分だった。覚醒的刺激がもたらされ、そのことがさらなる有効な経営手腕発揮の源泉となったからだ。彼らは顧客のマジョリティ日本人からの支持を得るべく高い品質やサービスを絶えず提供しなければならなかった。イノベーション遂行に要請されるのは知的能力よりも、それを成し遂げようとする強固な意志力である。その意志力は血統的自尊心を基底とした民族的矜持の度合いと相関関係に立っていた。朴景雨によれば「韓国人は素晴らしい頭の持ち主であり」⁵⁵、徐福龍によれば「我が民族は優秀」である⁵⁶。金熙秀は「韓国人と日本人を比較すれば、あらゆる点で韓国人のほうが日本人より優秀だ」という確信があります。(略)しかし、それにもかかわらず、韓国は日本の侵略を受け、日本人が韓国人を差別する時代がつづきました。そんなバカなことが許されてたまるか。植民地のままにされてたまるか。国が侵略されたのなら、いやしくも個人対個人で韓国

人の力量をみせてやろうではないか、それならば負けない」と意気込んだのだ⁵⁷。モランボンには「この異国で全鎮植という一人の朝鮮人が生きていたという証、それも朝鮮民族にとって有益な証を残したい。そう思ってやり始めたのが『朝鮮の味』の普及」であり「日本では朝鮮文化に対する評価はきわめて低い。(略)この朝鮮文化に対する蔑視のようなものが朝鮮料理への評価を低くしています。しかし、『朝鮮の味』は世界に誇れる(略)世界の一流水準」にあるという確信にもとづき起業した⁵⁸。前代未聞の「タクシー運賃値下げ訴訟」等で既得権を侵された京都府タクシー業界は愈奉植を憎悪し「チョーセン・タクシーには乗るな」と中傷した⁵⁹。しかし、愈は屈しなかった。大阪地裁で「私にチャンスを与えてほしい。(略)第二の故郷である京都で都市交通を改革してみたい。六十万の同胞がみな見ている。われわれもやればできるという勇気を与えてくれ」と訴えている⁶⁰。このように差別に対する反発性はマイノリティの起業家活動における卓越性発揮の条件とみなすことができる。

(2) 出自の公表と積極的な広報活動

資質、能力、才能、努力等とは何ら関係のない出自を克服し、劣等的地位から上昇した人々は歴史的存在である。彼らの属した国家社会の成熟度や民度の発展段階を知り、人類が数千年かけて到達した普遍的正義・人権の度合いをはかる明確な指標となるからである。当該成功者は同じ境遇の人々に勇気と希望を与える社会的存在である。現代日本はかつての差別的な国家社会から脱却しつつあるということを実証する歴史的証人でもある。マイノリティの出自の公表の意義であり、その実践は個々の心性にかかっている。しかし、未だ出自の公表につき消極的な韓人は少なくない。例えば、缶容器に窒素を無菌補填する製法技術で特許取得し、コンビニ等の飲料水 OEM 供給大手日本サンガリアベバレッジカンパニーの石山豊である。出自に対する「怪しい風聞」が絶えないが確定できない者もいる。親族や知人、元従業員や同業者等により流布される場合が多い。例えば、消費者金融武富士の武井保雄⁶¹、イトーヨーカ堂の伊藤雅俊やライオンズマンション大京の横山修司⁶²、ABC マートの三木正浩、フィールズの山本英俊、かまどや本家の金弘周等である⁶³。起業当初は同胞社会との紐帯を堅持していたが、企業規模の拡大につれ沈黙する者がいる。例えば、辛格浩、孫達元、趙鏞世等である。他方、出自の公表につき積極的なのは、鄭東弼、愈奉植、呉永石、林武志、孫正義、李鳳宇、ヨシダフーズの吉田準輝、OK ウェイブの兼元謙任等である。

韓人起業者の特性は、出自の公表の度合いにかかわらず積極的な広報活動にある。広報活動は企業イメージを高め消費者の信頼や安心、ブランド性を高めることに主眼がある。韓人は「負のイメージをもつ出自」により、顧客としなければならないマジョリティから信頼や安心のない真逆の立場におかれた。ゆえに、良いイメージの重要性を体験的に悟っており、その心性が積極的な広報活動に反映したと考える。嚙矢はロッテの辛格浩である。58年当時、放送開始5年目のテレビのCMにはスポンサーがつかなかった。だが彼はテレビの広告威力を信じ重視した先駆けだった。戦後も引き続き劣等的地位におかれた朝鮮人でありながら、「強い日本人レスラー・力道山」となり、街頭テレビ等で日本国民を熱狂させて戦後最大のヒーローとなった金信洛の成功を目の当たりにし、注意深く洞察したからであろう。テレビを通じたプロレス興行の成功をガム工業にも応用でき

ると考えたとしても何ら不自然ではない。辛は清潔、清純、健康をコンセプトにした「ロッテ歌のアルバム」を提供し「お口の恋人ロッテ」を浸透させた。ロッテのテレビCMが業界屈指の水準と言われるのは辛の方針を忠実に反映したものとみなせる。61年には新聞広告で「ロッテ一千万円現金獲得天然チクルガムセール」を展開した。会員の平均月収が2万5千円の時代、ガム100円分の外箱を送ると抽選で1千万円が当たるといった。760万口の応募があったが、懸賞金額が前代未聞で高額なため公正取引委員会が調査を開始した。しかし、処罰する法律がなかった。この反省をふまえ制定されたのが「不当景品類及び不当表示防止法」である。この広報活動を通じたイメージアップ戦略は模倣者を輩出した。マイノリティの典型的生業は金貸しである。韓人業者も多かったが、彼らの人口が少ない鹿児島県ではマイノリティ・奄美大島出身者が担っていたといわれている。在阪韓人が考案した「団地金融」が、東京進出にともない改名したのが「サラ金」である。消費者金融と名を改めたが、利息制限法等のグレーゾーンを悪用した高利息と厳しい取り立てによりそのイメージが悪かった。これをテレビCMを通じて払拭せんと欲したのがアイフルの福田吉孝である。2002年「まじめな中年サラリーマン風お父さん」の愛犬家とチワワの「くーちゃん」とが繰り広げるCMが功を奏し、30代以下の若い世代の消費者金融に対する抵抗感の払拭に成功した。おそらくこの成功を模倣したのが孫正義である。孫は野村證券等のドロップアウト組を活用した金融投資により獲得した資本でテレビ朝日や日本債券信用銀行の株式を取得し、メディア事業や銀行業への進出をはかったが挫折した末、辿り着いたのが通信事業だった。「YahooBB 端末無料配布」は革新的だったが、2006年にボーダーフォンを買収したもののNTTドコモやAUの後塵を拝し、巨額の借入金及び金利負担や低位の電波環境による不通の苦情が多く破綻を囁かれていた。その苦境から救ったのが2007年開始の「話すお父さん犬」と「サザエさん一家を彷彿させる白戸家」のホームドラマ的CMである。この犬はアイフルのCMの愛犬家とチワワとが合体したものであり、白い小型犬に共感をもった若い世代の深層心理に訴え、その心性を購買意欲にスライドさせたと考える。内容や中身よりも、良いイメージを重視する日本人の心性を理解したCMであり、出自という悪いイメージで苦しめられてきた体験が活かされたマイノリティ的感性の所産と言える。これ以外にも、アイリスオーヤマ、リープ21、マルハン、フィールズ、かつてのモランボンや朝日ソーラー等も広報活動に積極的だった。

5 結一「一世」と「二世」「三世」との内面的特性の異同

「一世」は起業者精神の重要な構成要素はクミアンヒヤン 錦衣還郷とスグチヨシム 首邱初心である。例えば、全鎮植は「将来の夢を見るときには、いつもあの貧しい農村の故郷が思い出され」⁶⁴、渡日して以来、「一日とて国に帰ることを考えなかったことはありません。いずれの日にか国へ帰って国の建設に役立ちたいと思い行動してき」⁶⁵たが、「祖廟もあるいは先祖の墓も、何をするともできず手をこまねいている辛い時代であった。(略) 祖先の霊をなぐさめることなぞ到底できることではない。(略) 故郷を離れて五十数年という歳月が過ぎてしまった。いまだに、赤い絨毯が敷かれたときに、その上を胸を張って歩いて故郷に帰っていくんだという思いから、帰郷をじっと我慢している」と語っ

た⁶⁶。この「一世」の起業者精神が韓国大統領・朴正熙や北朝鮮主席・金日成が要請した本国投資へと「一世」を誘引したと考える。彼らが起こした企業が、客観的に二流以下の企業規模と実力しかなかったとしても、国家の経済再建という愛国主義の美名に基づく本国投資は彼らに一流のステータスを約束し、名誉心と自尊心を満たしたことは疑いもない。また被差別者として劣等的地位におかれた根本的原因が亡国にあったという歴史的体験から国家に対する憧憬心が「一世」の本国志向をもたらしたとと言える。例えば、解放後の韓人が日本当局から「第三人」と呼ばれて金融の道を閉ざされた際、民族信用組合創立に奔走した日新化工の姜鐘は言う。困難に立ち向かう「エネルギーの源は、二度と植民地時代の奴隷の苦渋をなめたくない。(略) 独立国家の公民として自らの手で自分たちの民族的権利を守りながら生活を築いていくのだ」という決意であった⁶⁷。

他方、「二世」「三世」には「一世」同様の心性が薄かった。日本で生まれ育ったという事実そのものが同化の客観的条件となり、「一世」と異なり韓民族的資質が低かったからである。ゆえに韓民族的矜持には限界があり、差別に遭遇した際の反発性が減殺された。例えば、「一世」の全鎮植と「三世」の孫正義はいずれも小柄な体格だが反発性には差異があった。全は少年時代、鼻を指でつまんだ同級生から「ニンニク臭い」と侮辱される都度、喧嘩で応酬できる民族的矜持を有していたが、孫にはそれが無かった。幼少期、近所の子供から「チョーセン人」と怒声をあびせられ石を投げつけられたが抵抗しなかった。むしろ出自を隠すことを決心したという⁶⁸。通名を名乗り「言葉も習慣も見てくれも日本人とほとんど変わらないですから、日本人になりきろうと思えばなりきれ。だからなおさらのこと隠していることがいつかわかってしまうんじゃないか」と恐れていた⁶⁹。差別に反発できる程、民族的矜持が強くは無かったといえる。孫は韓民族としてのアイデンティティに目覚めることはなく、一度訪ねた韓国は「実態としては外国みたいなもの」であった⁷⁰。つまり孫は、血統と国籍、そしてその生い立ちによって涵養された被差別者としての屈折した感性を除けば日本人であったといえる。ただ、このマイノリティ的感性が、完全同化の歯止めとなり起業者活動における意外性発揮の源泉になったと考える。しかも「二世」「三世」は「一世」のように祖国から受け入れられない。例えば、メイセーの金徳吉は青年期に「祖国に何ができるのか」という意志をもって韓国に留学したが、韓国人の反応は「言葉もできない君らがここに来て何ができるのか」という「冷たいもので、当初の意気込みは急速にしぼんでしまった」⁷¹。彼らの成功を判定するのは、「一世」のように祖国や同胞ではなく実質的な故郷日本及び日本人なのだ。ゆえに彼らは葛藤する。三信金属の朴正準によれば「福祉事業に投資したりすれば、韓国人は自分たちのことだけでなく、日本社会にも貢献しているんだというイメージがつくれる。「韓国人はごまかしをする」と中傷される中、「一生懸命そう言われまいと頑張ってきた」⁷²。全秦通商の全親民によれば「差別・偏見もあり、その中で生きてきたのがベースにあったのだろうが、19歳の時からカネを儲けて日本社会に韓国人の心意気を示してみせるとの思いで頑張ってきた」⁷³。アイリスオーヤマの趙鏞世によれば「私は、在日韓国人ですけれど、会社は日本法人ですから、会社の代表として動くのがほとんどです」。韓人は「一人一人の能力としては、日本人を含めた他の国の人と比較してもなんら劣るところはない。(略) 不幸な植民地政策や朝鮮戦争から経験させたものがハンディキャップになっている。(略) 裏を返せばこのハンディキャップがハングリー精神やバイタリティー

になっている」⁷⁴。福井鯖江の同業者から「家の明かりは消えても石山の灯は消えなかった」と言わしめるほど寸暇を惜しんで働いた石山メガネの金柄龍は、出自という「ハンディをカンフル剤にした」⁷⁵。叙々苑の朴泰道が、一等地出店にこだわっているのは「朝鮮人として馬鹿にされてなるものか、という思いが根底に強くあった」からである⁷⁵。呉学園の呉永石は「在日朝鮮人という特殊な立場を自分にとってプラスの作用をおよぼす触媒にしなければならない」と信じた。彼は重度の腎臓病で週2回約7時間の人口透析を義務づけられ聴覚と左目の視覚も失い歩行困難となったが経営に没頭した。「なぜこんなに働くのかと、よく聞かれるのですけれども、自分が朝鮮人だからがんばっている、やっぱり日本人には負けたくない。(略)事業が起こせたのは自分にハンディがあったからじゃないか。もしもぼくが朝鮮人でなかったら何回も挫折してしまっているんじゃないか。(略)日本人だったとすればこれほどまでには働かなかった」⁷⁷。

このように「二世」「三世」の起業者精神も異質である。しかし彼らは、韓民族的矜持を信奉していた「一世」は異なり、出自という客観的ハンディをメタ認知し、コンプレックスを起業者精神の構成要素にしたと考える。だがそれは「一世」同様、強い起業意志力とリーダーシップ発揮の原動力となった。その基底にあるのは、自己に対する揺るぎない自信であると同時に、血統や国籍以外日本人と何ら異なる自己をマイノリティとして差別した日本社会に対する不信感の裏返しでもある。これは「二世」「三世」の同化の進行によるものであり、強い民族的矜持を有していた「一世」とは本質的に異なる起業者精神である。以上、筆者は10年前に提示した仮説を引き続き主張し、本稿で展開した新たな知見は単著の増補版に加味する。

- *1 M・ヴェーパー (大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1989年(原著1920年)23～24頁。
- *2 W・ゾンバルト(金森誠也訳)『ブルジョワ近代経済人の精神史』中央公論社、1990年(原著1913年)、385～387頁。
- *3 R. E. Park, "Human Migration and the Marginal Man", *The American Journal of Sociology*, volume XXXIII, May 1928, pp. 881-893. E. V. Stonequist, "The Problem of the Marginal Man", *The American Journal of Sociology*, volume XLI, July 1935, pp. 1-12.
- *4 B. F. Hoselitz, "Main Concepts in the Analysis of the Social Implications of Technical Change", in B. F. Hoselitz and W. E. Moore (eds.), *Industrialization and Society*, Unesco-Mouton, 1966, pp. 26-27.
- *5 F. W. Young, "A Macrosociological Interpretation of Entrepreneurship", in P. Kilb-y (ed.), *Entrepreneurship and Economic Development*, 1971, Free Press, Macmillan, p. 141, p. 143.
- *6 安藤百福については河明生『マイノリティの起業家精神—在日韓人事例研究』ITA、2003年、141～158頁。宇野元忠については河明生「日本におけるマイノリティの経済経営問題—大阪有線放送創業者・宇野元忠の事例研究」『東アジアのグローバル化と地域統合』所収、ミネルヴァ書房、2007年、119～134頁。
- *7 河明生『韓人日本移民社会経済史—戦前篇』明石書店、1997年。
- *8 河、前掲書、2003年。本書は①「日本におけるマイノリティの起業者活動—在日一世朝鮮人の事例分析」『経営史学』第30巻第4号所収、東京大学出版会、1996年。②「日本におけるマイノリティの「起業者精神」—在日一世韓人と在日二・三世韓人との比較」、経営史学会編『経営史学』第33巻第2号所収、1998年。③「民族的マイノリティに属する企業者の精神—東京圏在勤『在日二・三世コリアン企業者』の意識調査より」『研究論集』第19号所収、神奈川大学大学院経済学研究科、1993年9月。④「マイノリティの経済問題—世代別経済の上昇法則と起業者活動」『新・東アジア経済論』所収、ミネルヴァ書房、2001年等の集大成である。

*9 本稿は新聞、雑誌、非学術書等から、韓人が公表した発言を抽出し、彼らの起業動機を推論する資料として使用している。学術的批判に耐えるものではないかも知れない。資料的限界を知らながらも、資料とみなすのは次の理由による。韓人がマイノリティとして日本人から識別されるのは外見ではない。言動を通じた精神的特性の表徴によって注目され、それに接した日本人が、自己の体験を通じて形成された日本人観とは異なる異質性を感じたとき可能となる。日本名を使用している韓人は、日本人と接する際、絶えず緊張している。出自の公表は有利に作用しないことを体験的に知っているからである。ゆえに、事業上、日本人よりも「日本人の美風」を体現しようと努力する傾向がある。主たる取引先や顧客をマジョリティ・日本人に求めなければならないからであり、出自が発覚したとしても、人物本位で判断して欲しいという願望に似た深層心理が作用しているからである。韓人の異質な精神的特性を無作為抽出の聞き調査などによってサンプリングすることは困難である。被差別マイノリティは猜疑心が強いからである。自己が被調査者として選ばれた経緯に疑念を抱くのだ。しかし、同質性の強い絶対多数の国民によって形成される日本において出自を隠しとおすことは容易ではない。とくに「一世」は移民第一世代であるがゆえ、幼年期渡日者を除けば、その日本語からは朝鮮語訛りが認められる。また、韓人の縁戚者や知人、在日本朝鮮人総聯合会(以下、総聯)や在日本居留民団(以下、民団)等が、金策や無心、寄付などの理由で面会を求めてくる場合が少なくない。彼らの出自は、多くの場合、彼らと普段接する機会が多い日本人従業員によって外部にもれながら、徐々に噂として広まるようである。その出自の周知は、速いか遅いかの程度の差にすぎない。かくて彼らは、韓人中の成功者として、日本および総聯や民団傘下の各種マスコミから注目され、取材の申込みを受けることがある。経済大国・日本の企業レベルからみれば、企業規模や実績等では、それほどの企業でなかったとしても、経営者がマイノリティ出身であるという事実そのものが注目され、各種メディアを通じて報道されるが、取材を受ける条件として、刊行以前の内容の確認による削除や修正等を求める者もいるであろう。とすれば、それをそのまま引用すべきではない。しかし、着目しなければならないのは、それは韓人によって公表された見解であるという事実である。マジョリティやマイノリティであるか否かにかかわらず、起業者精神は彼自身によって公表された見解でなければならない。それが資料として若干問題があろうとも、批判的に取捨選別できるのであれば、資料として有用である。

- *10 森田芳夫「戦後における在日朝鮮人の人口現象」『朝鮮学報』47輯、1968年、56頁、62～64頁。
- *11 高権三『大阪と半島人』東光商会書籍部、1938年、113～120頁。
- *12 詳細は、河、前掲書、2003年、18～43頁。
- *13 日本ゴム工業会『日本ゴム工業史』第2巻、東洋経済新報社、1969年、563頁。
- *14 日本軍の南方戦線への物資補給の要・神戸港には、マレーシア等から持ち去ったゴム原料が保管されていた。
- *15 問部洋一『日本経済をゆさぶる在日韓商パワー』徳間書店、1988年、39～40頁。
- *16 E・W・ワグナー『日本における朝鮮少数民族1904年～1950年』1951年、湖北社、91頁。
- *17 社会問題資料研究会編『帝国議会誌』第1期第51巻、1979年、東洋文化社、131～133頁。
- *18 前川恵司「『在日』の英雄・ロッテ重光武雄伝」、『文藝春秋ノンフィクション』所収、文藝春秋社、1987年、104頁。
- *19 ワグナー、前掲書、17頁。
- *20 『法令全書』昭和二十四年三月号、印刷局、1949年、60頁。
- *21 『法令全書』昭和二十五年一月号、印刷局、1950年、5頁。
- *22 『法令全書』昭和二十七年四月号、印刷局、1952年、487頁。
- *23 『ロッテアルミニウム二十年史』1987年、90頁。
- *24 『ロッテ七星40年史』1990年、137頁。
- *25 問部洋一、前掲書、239～240頁。
- *26 小林靖彦編『在日コリアン・パワー』双葉社、1988年、199頁。
- *27 神戸市社会課「朝鮮人の生活状態調査—昭和十一年」『在日朝鮮人関係資料集成』第3巻、アジア問題研究所、1982年、1096頁。
- *28 ワグナー、前掲書、79～80頁。
- *29 野村進『コリアン世界の旅』講談社、1996年、97頁。
- *30 『朝日新聞』夕刊、1996年11月22日。
- *31 朝鮮商工新聞社『民族と経営理念—朝鮮人企業家の群像(1)』1986年、153～154頁。
- *32 徐龍達「在日韓国朝鮮人の職業と経営の実態」『桃山学院大学経済学論集』第14巻第3号、1972年、417頁。

- *33 「特集 在日コリアン新世代パワー」『SPA!』10月30日号, 43頁。
- *34 『統一日報』1982年9月7日。
- *35 前掲『民族と経営理念』159頁。
- *36 間部洋一, 前掲書, 236頁。
- *37 宮田浩人『65万人—在日朝鮮人』すずさわ書店, 1977年, 29頁。
- *38 前掲『民族と経営理念』103頁, 108頁。
- *39 同上, 127頁。
- *40 同上, 88頁。
- *41 『統一日報』1982年9月21日。
- *42 前掲『民族と経営理念』53頁。
- *43 小林靖彦, 前掲書, 31頁。
- *44 徐龍龍, 前掲, 174-175頁。
- *45 『統一日報』1982年7月22日。
- *46 『統一日報』1983年7月7日。
- *47 前掲『民族と経営理念』122頁。
- *48 『統一日報』1992年4月17日。
- *49 「現代の肖像 マルハン会長 韓昌祐」『AERA』2001年5月14日, 65頁。
- *50 『ロッテ製菓20年史』1987年, 89頁。
- *51 川崎製鉄元社員N氏証言, 1994年9月24日, 聞取り。
- *52 『ロッテ製菓20年史』前掲, 89頁。
- *53 『ロッテ建設30年史』1989年, 97頁。
- *54 『財閥白書』図書出版韓脈, 1983年, 208頁。
- *55 『統一日報』1992年7月3日。
- *56 『統一日報』1992年7月17日。
- *57 小坂橋次郎『コリアン商法の奇跡—日本の中のパワービジネス』こう書房, 1985年, 186頁。
- *58 同上, 126頁。
- *59 反韓国人観をあらわにした京都個人タクシー運転手証言。小林靖彦, 前掲書, 29頁。
- *60 加藤勝美『MKの奇跡』ジャテック出版, 1985年, 187～188頁。
- *61 武井保夫が在日韓国人である, と断言したのは, 池東旭『在日をやめなさい』ザ・マサダ, 1997年, 35頁である。
- *62 「伊藤さんと横山さんは朝鮮人だと財界では皆そう言っています」と筆者に証言したのは呉永石である(1997年6月22日)。伊藤については子の同級生O氏(婦化者)が「伊藤さんもあちらの方よ, と親達が言っていました」と証言している(2006年7月10日聞取り)。兄は異父兄。夫と死別した母が「金子専蔵」と「再婚」し伊藤が生まれた, 籍を入れていなかったため, 28歳迄, 「金子雅俊」と名乗っていた。彼の複数の著書は実父について一切ふれていなかったが, 自伝で初めてふれ, 母と別れたことや「私は葬儀にも行きませんでした。それくらい縁の薄い人でした」と回想している。伊藤雅俊『商いのところ』日本経済新聞社, 2003年, 16～21頁。
- *63 発信源はインターネットである。例えば, 三木は夫人がチョゴリを着ている結婚式の写真を公開されている。山本は父が愛知県で創業した屑鉄業・東洋商事の元従業員が「社員の多くが在日で, 海外社員旅行の際, パスポートの色が違っていた」と発信された。
- *64 全鎮植『わが朝鮮私の日本』平凡社, 1993年, 174頁。
- *65 小坂橋次郎, 前掲書, 126頁。
- *66 全鎮植, 前掲書, 33-35頁。
- *67 「朝銀東京創立40周年記念座談会」, 朝銀東京信用組合『40年の軌跡』1992年。
- *68 「ソフトバンク大研究第1回 虚王 孫正義」『アエラ』2000年5月29日, 29頁。
- *69 孫正義・田原総一郎「政治家は国家の経営者たれ」『中央公論』1998年4月号所収, 231頁。
- *70 同上, 233頁。
- *71 『統一日報』1992年11月13日。
- *72 『統一日報』1992年1月24日。

- *73 『統一日報』1992年2月29日。
- *74 『架け橋』第8号, 1995年, 4～5頁。
- *75 『統一日報』1982年11月12日。
- *76 『焼肉文化』第56号, 焼肉文化社, 1997年, 10頁。
- *77 小坂橋次郎, 前掲書, 37頁。1997年6月22日聞取り。

《参考文献》

- ・ ヴェーバー・M (大塚久雄訳), 1989 (1920) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫
- ・ 河明生, 1997 『韓人日本移民社会経済史—戦前篇』明石書店
- ・ 河明生, 2003 『マイノリティの起業家精神—在日韓人事例研究』ITA
- ・ 河明生, 2007 「日本におけるマイノリティの経済経営問題—大阪有線放送創業者・宇野元忠の事例研究」平川均・石川幸一・小原篤次・小林／尚朗編著『東アジアのグローバル化と地域統合』ミネルヴァ書房
- ・ 加藤勝美, 1985 『MKの奇跡』ジャテック出版
- ・ 高権三, 1938 『大阪と半島人』東光商会書籍部
- ・ 神戸市社会課, 1982 「朝鮮人の生活状態調査—昭和十一年」『在日朝鮮人関係資料集成』第3巻, アジア問題研究所
- ・ 小坂橋次郎, 1985 『コリアン商法の奇跡—日本の中のパワービジネス』こう書房
- ・ 小林靖彦編, 1988 『在日コリアン・パワー』双葉社
- ・ 社会問題資料研究会編, 1979 『帝国議会誌』第1期第51巻, 東洋文化社
- ・ 徐龍達, 1972 「在日韓国朝鮮人の職業と経営の実態」『桃山学院大学経済学論集』第14巻第3号
- ・ 池東旭, 1997 『在日をやめなさい』ザ・マサダ
- ・ ゾンバルト・W (金森誠也訳), 1990年 (原著1913年) 『ブルジョワ—近代経済人の精神史』中央公論社
- ・ 朝鮮商工新聞社, 1986 『民族と経営理念—朝鮮人企業家の群像(1)』朝鮮商工新聞社
- ・ 日本ゴム工業会, 1969 『日本ゴム工業史』Vol.2, 東洋経済新報社
- ・ 野村進, 1996 『コリアン世界の旅』講談社
- ・ 前川恵司, 1987 「『在日』の英雄・ロッテ重光武雄伝」『文藝春秋ノンフィクション』文藝春秋社
- ・ 間部洋一, 1988 『日本経済をゆさぶる在日韓商パワー』徳間書店
- ・ 宮田浩人, 1977 『65万人—在日朝鮮人』すずさわ書店
- ・ 森田芳夫, 1968 「戦後における在日朝鮮人の人口現象」『朝鮮学報』47輯
- ・ ワグナー・E・W, 1951 『日本における朝鮮少数民族1904年～1950年』湖北社

自伝

- ・ 伊藤雅俊, 2003年『商いのところ』日本経済新聞社
- ・ 全鎮植, 1993『わが朝鮮私の日本』平凡社

英語文献

- ・ B. F. Hoselitz, 1966, "Main Concepts in the Analysis of the Social Implications of Technical Change", in B. F. Hoselitz and W. E. Moore (eds), *Industrialization and Society*, UNESCO.
- ・ E. V. Stonequist, 1935, "The Problem of the Marginal Man", *The American Journal of Sociology* 41.
- ・ F. W. Young, 1971, "A Macrosociological Interpretation of Entrepreneurship", in P. Kilb-y (ed), *Entrepreneurship and Economic Development*, Free Press, Macmillan.
- ・ R. E. Park, 1928, "Human Migration and the Marginal Man", *The American Journal of Sociology* 33.

韓国語文献 (社史等)

- ・ 『ロッテアルミニウム二十年史』1987年
- ・ 『ロッテ七星40年史』1990年
- ・ 『ロッテ製菓20年史』1987年
- ・ 『ロッテ建設30年史』1989年
- ・ 『財閥白書』図書出版韓脈, 1983年

雑誌関連

- 「特集 在日コリアン新世代パワー」『SPA』10月30日号, 43頁
- 「現代の肖像 マルハン会長 韓昌祐」『AERA』2001年5月14日, 65頁
- 「ソフトバンク大研究第1回 虚王 孫正義」『アエラ』2000年5月29日, 29頁
- 孫正義・田原総一郎「政治家は国家の経営者たれ」『中央公論』1998年4月号所収, 231頁, 233頁
- 『架け橋』第8号, 1995年, 4～5頁
- 『焼肉文化』第56号, 焼肉文化社, 1997年, 10頁
- 「朝銀東京創立40周年記念座談会」, 1992, 朝銀東京信用組合『40年の軌跡』

聞取り

- 川崎製鉄元社員N氏証言, 1994年9月24日, 聞取り
- 呉永石氏証言, 1997年6月22日聞取り
- TBS元社員O氏証言, 2006年7月10日聞取り

法令

- 『法令全書』昭和24年3月号, 印刷局, 1949年
- 『法令全書』昭和25年1月号, 印刷局, 1950年
- 『法令全書』昭和27年4月号, 印刷局, 1952年

新聞

- 『朝日新聞』1996年11月22日夕刊
- 『統一日報』1982年7月22日
- 『統一日報』1982年9月7日
- 『統一日報』1982年9月21日
- 『統一日報』1983年7月7日
- 『統一日報』1992年1月24日
- 『統一日報』1992年2月29日
- 『統一日報』1992年4月17日
- 『統一日報』1992年7月3日
- 『統一日報』1992年7月17日
- 『統一日報』1982年11月12日
- 『統一日報』1992年11月13日

Ethnic Attributes and Entrepreneurial Activities:

An Overview of Korean Migrants' Entrepreneurial Activities and Their Inner Emotions in Japan

KAWA Meisei

Japan Taekwondo Association

Key Words: entrepreneurial activities of minority groups, uniqueness, assimilation

Minority groups tend to develop profit-making talents through entrepreneurial activities, because of the difficulty that they face achieving upward social mobility. A correlation is identifiable between ethnic attributes and entrepreneurship. Among ethnic minority groups in Japan, Korean migrants constitute a group that has shown superiority in entrepreneurial activities. The author, in his book *Entrepreneurship of a Minority: A Case Study of Koreans in Japan*, claimed that they were “unique,” and that they often demonstrate business excellence. The uniqueness and business excellence of Koreans in Japan are found in their entrepreneurial capability to establish a business from the beginning. This paper re-examines the abovementioned statement.

The inner emotions of Koreans in Japan are described as traumatization and disobedience. The first generation of Koreans had strong ethnic pride, having rebelled against the host society, while still earning a reputation for their hard work. The second and third generations are different, in that they have less ethnic attributes due to their assimilation into Japan. However, the experience of discrimination against the younger generations of Koreans born in Japan has prevented the complete assimilation of the ethnic minority group, while contributing to the generation of uniqueness in entrepreneurial activities. Regardless of their attitudes toward their own ethnic backgrounds, Korean entrepreneurs expanded public relation activities because they have long suffered from their negative image as a minority in Japan. In other words, they are aware of the significance of a corporate image strategy.